

母さんのおはなし

一

雨降りの日、お母さんは、ぬい物をしながら、おはなしをしています。みつ子ちゃんは頬に両手をあてて肘をつき、腹ばいになって聞いています。

はじまり。

母ギツネと、いたずらものの子ギツネがいました。

雨の日、外に出れず、矢田山のほら穴で、ごそごそしていました。子ギツネはつまらな

くてしようがありません。お母さんに、人間に化けるやり方を教えてくれと、せがんで
います。

お母さんは、

「おまえが、もう少し大きくなってからね」

と、なかなか教えてくれません。けれど、あんまり子ギツネがせがむものだから、

「やれやれ、しょうのない子だねえ」

と化け方を教えてやりました。

母ギツネは穴の奥から、一枚の※ヤツデの葉を取りだしました。

「こっちの大きい葉っぱがお母さんので、こっちの小さい葉っぱがお前のだよ。お前がもっと大きくなってから、あげようと思っただけどねえ」

と、ため息をつきながら言いました。

その化け方というのは、とてもかんたんです。頭にヤツデの葉をのせて、しっぽで地面を三回たたくのです。

子ギツネは、

「これならすぐにできるぞ」

とおも
と思いました。

かあ
お母さんは、

「でもね、お母さんといっしょのときしか、やっちゃいけないよ」

と、子ギツネにきびしくいいました。けれど子ギツネは、うれしくて、そんなことは、

うわのそらです。聞いていません。

かあ
お母さんギツネと子ギツネは、二枚のヤツデの葉を穴の奥にもどして、雨があがるま

で、寝ることにしました。

それから、どのくらいたったでしょう。

外では、まだ雨が

「バシヤー、バシヤー」

とふっています。母ギツネが目をさますと、横で寝ていたはずの子ギツネがいません。

母ギツネは、

「ハッ」

と声をあげて穴の奥をみました。やっぱりです。小さい方のヤツデの葉がありません。

子ギツネがもつていったのです。母ギツネは、どしや降りの雨のなか、外へとびだして

行きました。

「コン、コン、坊やはどこ」

「コン、コン、坊やはどこ」

とさがしまわりました。谷へも行きました。村の中へも行ってみました。

村の人たちは、

「あれえ、ずぶ濡れの狐がはしってるぞ」

「どうしたんだ」

と、家のなかから見えます。

母ギツネは、なん日も、なん日も、寝ないで子ギツネをさがしましたが、とうとう見つかりませんでした。

四

子ギツネは人間の子どもに化けたけど、もともにもどるやり方を教えてもらってなかったのです。ウロウロしているところを、※人ざらいにさらわれて、どこか遠くにつれていかれたのかもしれない。

それから、子ギツネがいなくなったような雨の日には、母ギツネは、村はずれの茂みの中から、

「コーンコン、コーンコン」

となきながらでてきて、雨にぬれて遊んでいる人間の子供を見つけると、その子の頭にヤツデの葉をのせて、しっほで地面を一回たたくのです。そうして、子ギツネに、もどそうとするのです。でも、その子は、ほんとうの人間の子どもなので、子ギツネにはならず、声だけが、

「コン、コン」
となってしまうのです。

これで、おしまい。

みつ子^こちゃんは、はなしの途中^{とちゆう}から、ベソをかいていました。康^{こういち}くんは、窓^{まど}ガラスに流^{なが}れる雨^{あま}つぶを、みつめていました。お母^{かあ}さんのはなしを聞^きかないふりをしていまし
たが、ほんとうは、ずっと聞^きいていたのです。

※ヤツデの葉^は。手^てのひらのような形^{かたち}の大きな葉^{はお}。

※人^{ひと}さらい。子^こどもをだまして連^つれていく人^{ひと}。